

風信

我々はかつてみんな赤ちゃんだったの
で、漏れなく字が(字で)ころか言葉(す)ら
わからぬ時を過ごしているはずだが、
その頃を覚えている人に会ったことがな
い。字と言葉は、記憶と深い関係がある
のだと思う。

字を習うのは義務教育から。

それまで字は読めなくてもよい
ことになっている。けれど不思議
なこと、世の中には「赤ち
ゃんの本」がたぐやんと出ていて、
それらにはちゃんと字が書いて
あるのだ。赤ちゃんは字が読めないとい
うのに。つまり赤ちゃんは、自分で読む
のではなく「読んでもらう」のである。
学校で字を習う時、学習法や到達目標
は定められており、教科書に書いてある。



学校には法律
で定められた
学校図書館が
あり、文字教
育と分かち難
いものとして

読書教育もある。「教育」である。

ではそれより前の段階の「読んでもら
う」本、読書はどいつだぞう。「これよん
でえ」と子どもが絵本を持つてきて、
「どれどれ」とお膝ののせて読んでやる
とする。その時、読んでもらう方と読ん
でやる方の気持ちはどつか、どんなやり
取りが子どもとの間にあるだろうか。

双方とも、識字能力や語彙力、読解力
の向上を意識してはいまい。ましてや字
どころか言葉も話せない赤ちゃんに絵本
を

もある。反応が言葉で返ってくることは
限らず、視線や表情、体の動きもあり、
そこで相手の気持がちゃんと考えを掴もうとす
る。

ここには原初的で根本的な人間同士の
応答関係があり、絵本はそれを人間のか
なり早い段階からやっている。それはま
た、赤ちゃんが言葉を獲得し社会化する
過程の一部を担う。もしかしたらその過
程に絵本は必須ではないかもしれない
が、現代の子育てにおいて、担っている
のは事実だと思う。

本を読んであげる

後藤 修平

を読んでやるという思う時の、「こちらの気
持ちはどいつだろう」「よりよい人生を」
という大きな願いや祈りこそあれ、明確
な獲得目標や目的はない。

その時何を「読もうかな」とは、
「読んでやるうかな」と立場がかわって
いることはまず確認しておきたいが、絵
本を読んでやるというときは、言葉をか
けて交流するのだ。温かな身体の触れ
あいだつがある。赤ちゃんだし子どもだ
から拒否もあれば「無反応」という反応

私には、言葉で考え文脈で世
界を認識するのが人間だと考
えているが、とすると絵本は
「人間づくり」を、部分的に
せよやっていることになる
(と思う)。人間になっ
ていなければ、字も読めないし本も読め
るようにならない。ただ断っておくが、
その逆、「字が読めなければ人間でない」
は違う。字が読めるようになる環境、読
書できる環境を保障することは、まづに
人権の問題である。

読書推進を考えると、字が読める以
前の「人間づくり」に、どつ絵本が(紙
芝居も)関わっているのか、関われるの
か、そこにもどつフォーカスしたいのだ。
(重社社代表取締役社長)